

## 小論文 模擬課題文

次の課題文を読んで 800～1200 字程度で意見を述べなさい。記述の際は、下記の観点を入れること。

- (1) 課題文の内容を自分なりに要約（縮約）すること
- (2) 要約をした上で、自分の意見（気づいたこと、考えたこと、疑問に思ったことなど）を述べること。
- (3) 本文中に「できるだけたくさんのノイズが発生するような環境」とあるが、あなたの大学生活における音楽活動の中で、そうした環境を作るために実践できると思うことを述べること。
- (4) 最後に全体をまとめて自分の意見を明確に示すこと。

わたしの大学での授業の目的は、いつも「情報生産者になる」ことでした。情報には、生産・流通（伝達）・消費の過程があります。メディアは情報伝達の媒体、多くのひとたちはそこから得られた情報を消費します。もちろん学ぶことの基本は、「真似ぶ」こと。ですから他人の生産した情報を適切に消費することは、自らが情報生産者になるための前提です。

世の中にはたくさんの情報が流通しており、たくさんの情報消費者がいます。新聞やTVなどのマスメディアの情報を、聞きっかじりで訳知り顔にくりかえすだけの人もいますし、人の知らない情報源にアクセスして、レアな情報をゲットする情報オタクもいます。そのうえ情報グルメ（美食家）や情報グルマン（大食漢）、情報コノスツア（食通）までいます。情報の消費者には「通」から「野暮」までの幅があって、情報通で情報のクオリティにうるさい人を、情報ディレッタントと呼びます。もちろん質の高い消費者がいるからこそ、情報のクオリティも上がるのですが、情報も料理も、消費者より生産者のほうがえらい！ とわたしは断言します。料理だって、グルメの消費者より、料理をつくるひとのほうが、何倍もえらいんです。なぜかって、生産者はいつでも消費者にまわることができますが、消費者はどれだけ「通」でも生産者にまわることができないからです。

わたしは学生にはつねに、情報の消費者になるより、生産者になることを要求してきました。とりわけ、情報ディレッタントになるより、どんなつたないものでもよい、他の誰のものでもないオリジナルな情報生産者になることを求めました。

情報はノイズから生まれます。これが情報工学の基本です。ノイズのないところに情報は生まれません。

ノイズとは何か？ ノイズとは違和感、こだわり、疑問、ひっかかり……のことです。ですからあたりまえだと思って何も疑問も感じない環境のもとでは、ノイズは生まれません。

ノイズのなかから意味のある情報が生まれることがあります。情報にならずにノイズのまま終わってしまうノイズもあります。ですからできるだけたくさんのノイズが発生するような環境をつくっておくと、それだけ情報生産性が高くなるともいえます。

自分があたりまえだと思って何も疑問も抱かない環境では、ノイズは発生しません。これを社会学の用語では「自明性」と言います。反対に、自分から距離が遠すぎて受信の網にひっか

からない場合も、ノイズは発生しません。これを社会心理学の用語で「認知的不協和」といいます。聞こえているけれど聴かれていない、「選択性難聴」のような経験を、多くのひとはあじわったことがあることでしょう。

ですから、ノイズは自明性と疎遠な外部とのあいだ、自分の経験の周辺部分のグレーゾーンで発生します。情報の生産性を高めるには、ノイズの発生装置をまずつくらなければなりません。そのノイズのなかから、意味のある情報もまた生まれるからです。

ノイズの発生装置を活性化するのはかんたんです。

第一は自明性の領域を縮小すること。第二は疎遠な領域を縮小すること、それを通じて情報の発生する境界領域、グレーゾーンを拡大することです。どちらも自分にとってあたりまえのことがあたりまえにならないような環境に身を置くことによって得られます。そんなにむずかしいことはありません。ことばも習慣もちがう異文化に身を置くことや、それではコストが高くつくようなら、生い立ちや環境のちがう人や障害を持った人と身近に接すればいいのです。

情報を生産するには問いを立てることが、いちばん肝心です。それも、誰も立てたことのない問いを立てることです。適切な問いが立ったとき、研究の成功は半ばまで約束されているといっても過言ではありません。問いを立てるとは、現実をどんなふうに取り切ってみせるかという、切り込みの鋭さと切り口の鮮やかさを言います。

問いを立てるには、センスとスキルが要ります。スキルは磨いて伸ばすことができますが、センスはそういうわけにいきません。センスには、現実に対してどういう距離や態度を持っているかという生き方があらわれます。

誰も立てたことのない問いを立てる……ことを、オリジナルな問いと言います。オリジナルな問いには、オリジナルな答えが生まれます。それがオリジナルな研究になります。

ところでオリジナリティとは何でしょうか？

オリジナリティとはすでにある情報の集合に対する距離のことを言います。距離は英語では distance ですが、つまりすでにある知の集合からの遠さ distance を自分の立ち位置 stance というのです。

誰も立てたことのない問いを立てるには、すでに誰がどんな問いを立て、どんな答えを出したかを知らなければなりません。すでにある情報の集合を知識として知っていることを、「教養」とも呼びます。教養がなければ、自分の問いがオリジナルかどうかさえわかりません。

(上野千鶴子『情報生産者になる』(ちくま新書、2018年)により、出題に合わせて一部変更を加えた)